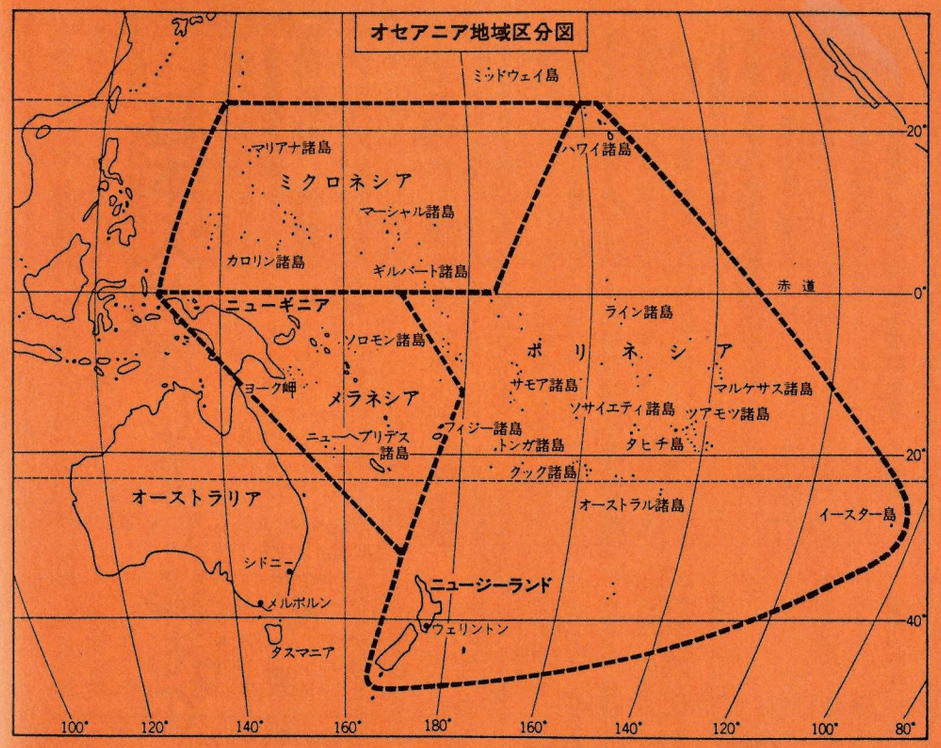
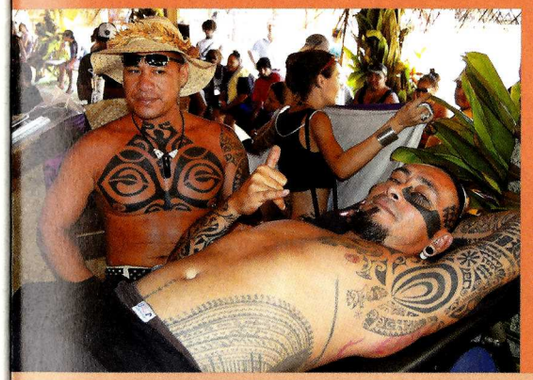
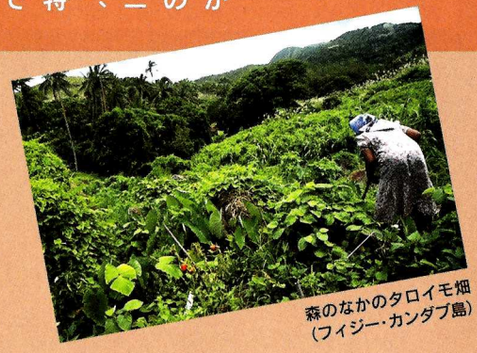
特集

オセアニア

さまざまな伝統や文化が広がったオセアニア。今月開催の開館三〇周年記念「オセアニア大航海展―ヴァカ モアナ、海の人類大移動」を機会に、特集ではグローバル化のなかでオセアニアの変わらぬ伝統や変わりゆく文化を紹介したい。




世界へ発信されるタタウ（刺青）
（タヒチ・モーレア島）


森のなかのタロイモ畑
（フィジー・カンダブ島）

出航準備をする
アウトリガーカヌー
（ミクロネシア・
ングルー環礁）

海と島とカヌー

印東 道子
（いんとう みちこ）
本館民族社会研究部

オセアニアのブタは
人間とともに拡散した
（ミクロネシア・ファイス島）

タロイモとともに重要な
主食のヤムイモ（ヴァヌアツ）

三〇〇〇年以上前に植民

地球を宇宙からながめると青く見える。広大な太平洋の青さである。ヨーロッパ人が太平洋の存在をはじめて知ったのは一五一三年にすぎない。そのはるか以前に、日本人と同じモンゴロイド系の人びとがすでに数千年にわたって、太平洋の島々で生活していた。

どうやってこの広い海を渡って多くの島にたどり着いたのか、その不思議はさまざまな説を生み出した。「オセアニアの島々は、大陸が沈んだ名残で、生き残った人が沈没しなかったところに住んだ」などの説は、人間が最初からそこに住んでいたという、ありえない前提によったものだった。

これまでにオセアニアでおこなわれた人類学、考古学、言語学、遺伝学などの研究は、オーストロネシア語を話す人間集団が、今から三〇〇〇年以上前に東南アジア島嶼（とうしょ）部から東へ植民を開始したことを明らかにしてきた。家畜（イヌ、ブタ、ニワトリ）や栽培植物（イモ類）を携えた植民は、漂流ではなく意図的に海を渡ったことを示している。

優れた船と航海技術

近い島ならいざ知らず、ハワイのように何日も島影を見ずに海を渡らなくてはならない遠い島へも植民できた背景には、優れた船と航海技術の存在があった。オセアニアの大半の地域では、海流や貿易風に逆らって航海しなくては東へ進めない。帆の角度を調節することで、風上に向かって航海したのは明らかである。

オセアニアの船にはふたつのタイプがあった。ひとつはシングル・アウトリガーカヌーで、船体の片側にアウトリガーが突き出て、浮きの役目を果たす。帆を立てる位置を変えることにより、どちらの先端をも船首にすることができ、風上に向かって航海することができる。いわゆるヨットのタック航法である。民博のオセアニアコーナーにあるチェチェメニ号はこのタイプだ。

もうひとつはポリネシアで発達したダブルカヌー（双胴船）である。平行して並んだふたつの船体は、長さ、幅、深さのどれをとっても大きく、空洞なので家畜や苗、食料などを大量に積み込むことができた。ハワイで復原されたホクレア号には一五人もの乗組員が乗り込んだ。

海上で進路を定めるには、太陽や星の位置、潮の流れ、鳥の飛んでいく方向、雲の形などが利用された。代々蓄積され継承された知識と技術は、近代航海器機にもひけをとらない。

一方で、島の生活は自然災害に弱い。津波や干ばつの前には人間は無力さを露呈する。にもかかわらず、数千年にわたってさまざまな工夫をしながら人びとは生活し、現代にまで生き続けている。グローバル化した現代世界において、彼らも伝統文化への誇りをさまざまなかたちで発信しはじめている。

カヴァで語り合う

吉岡 政德
（よしおか まさのり）
神戸大学教授

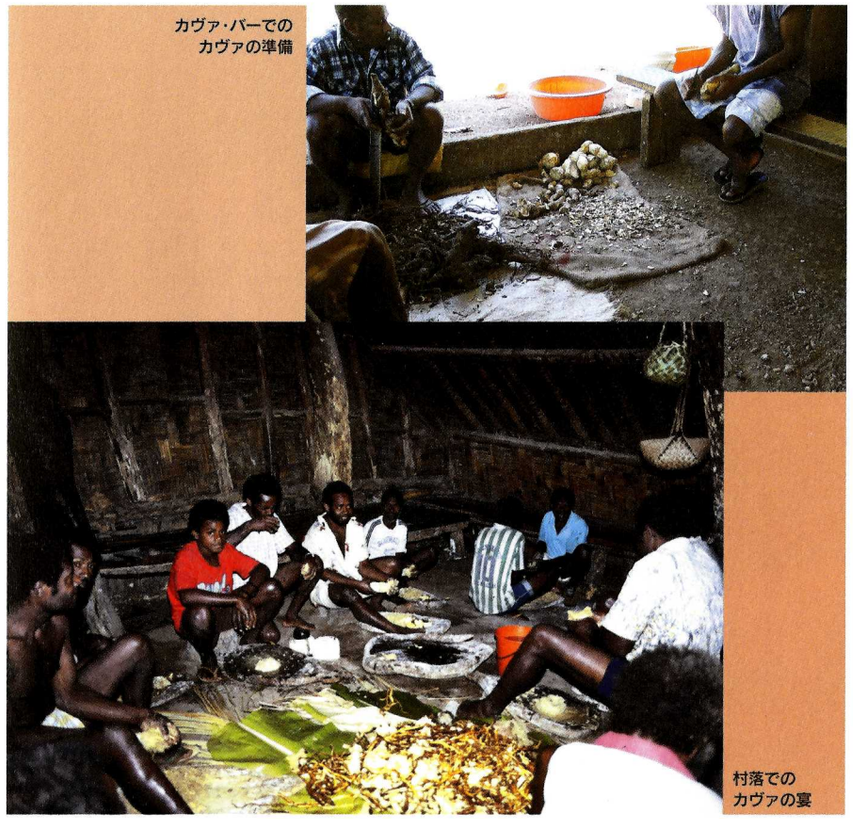
ノンアルコールで酔う

どの地域をフィールドとする場合でも同じであろうが、その地域の人びととリラックスして語り合う場をもつことを我々人類学者は求めている。酒を酌み交わすということが、そうした場を提供してきたことは誰でも知っている。そこでは本音を聞くことができるし、インタビューではえられない非公式の情報を共有することができて、部外者の我々もその地域の一員になったような気にさせてくれる。アルコールの力は確かに大きく、親密な友好関係もこうした場を共有することから生まれることが多い。わたしがしばしば訪れるヴァヌアツでは、こうした場は酒によってではなく、カヴァによって作り出されている。

カヴァというのはコショウ科の潅木（かんぼく）で、その根を砕いて水と混ぜ、浸出液を搾り出すことで、同名の飲み物ができあがる。カヴァには、アルコールではなくアルカロイド成分が含まれている。アルカロイドというのは薬物系であるが、カヴァのそれは毒性や依存性がほとんどないので麻薬というわけではない。しかし、酩酊（めいてい）や多幸感など薬物と類似の効果をもたらす作用がある。樹液に水をどれだけ混ぜるかによって、また、木の産地、種類、成長の度合いに応じて「強さ」が変わるが、強いカヴァは一杯飲んだだけで、体が急に軽くなり、自分の周りの世界が自分からは遊離したようなふわっとした状態になる。しかし、アルコールとは違って騒ぐ気分になるわけではなく、沈静作用があるため、静かに酩酊し、静かに語り合うことになる。

明日の活力を培う

ヴァヌアツでは、村落部でも都市部でも夕方にはカヴァが飲まれる。都市部には、カヴァを飲ませるバーが無数にあって、人びとは仕事が終わると三々五々これらのバーに集まって、一杯一〇〇円程度のカヴァを楽しむ。これらのバーでは、電気は使わずにアルコールランプを使う。村落を思わせるし、明るすぎるランプは眼に刺激がきつい。薄暗い店内では、いくつかのグループが静かに話している。なじみの店は、同じ島の出身者の経営するバーである。しかし、それらのなかでも、もちろん、味のよいカヴァを出すバーが繁盛する。強すぎるカヴァは、いがらっぽくてのど越しが悪い。弱すぎるカヴァは水みたいで、酩酊作用がない。のど越しが水のように滑らかだけど、適度な酩酊をもたらすカヴァが美味いカヴァなのだ。サラリーマンも、出身の村落を思い出しながら、明日の活力をこのバーで培っていく。我々部外者はというと、このバーで見ず知らずの人びとと静かに語り合う。わたしのオセアニア研究の楽しみのひとつである。



カヴァ・バーでのカヴァの準備

村落でのカヴァの宴

オーストロネシアン
―ことばで結ばれた人びと―

菊澤 律子
（きくさわ りつこ）
本館先端人類科学研究部

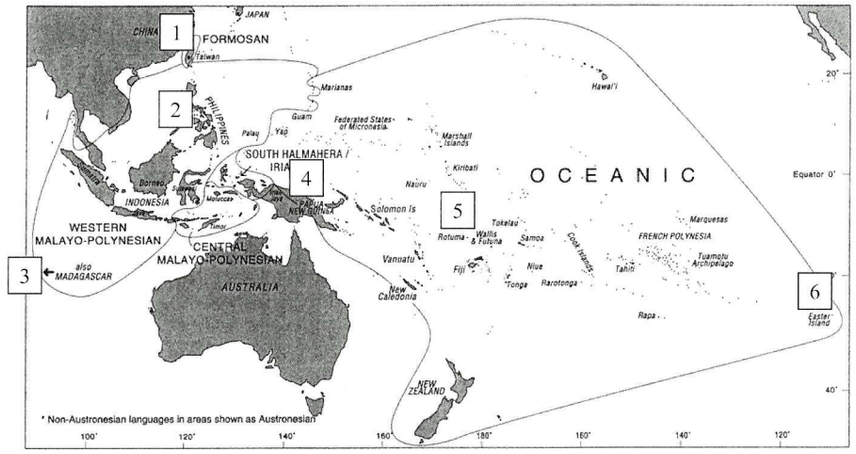
もっとも広く分布

オーストロネシア諸語とは、今から五〇〇〇年ほど前に台湾で話されていた「オーストロネシア祖語」から発達した言語のことをいう。そしてこの言語の話者たちをオーストロネシアンとよぶ。今から約五〇〇〇年前に台湾を出発したオーストロネシアンたちは、フィリピン・インドネシアを経てポリネシア、メラネシア、ミクロネシアなどの太平洋全域に広がった。さらにはインド洋の向こうにあるマダガスカルに定住した人びともいた。その結果オーストロネシア諸語は、地理的にもっとも広い分布を見せる言語族として知られている。ちなみに構成言語数は約一二〇〇言語となっている。

時間軸で結び付く

地球上の約三分の二に広がるオーストロネシアンたちの周辺は、気候、植生、地形などじつに多様だ。そのことばを見ると、人びとが新しい土地で新しいものに遭遇したときのことがわかって面白い。たとえば蚊を示す語は、nyamuk（ボルネオ島・ガジュ・ダヤクなど）、nóóm^{w}（ミクロネシア・サタワル語）、namu（フィジー語やポリネシア諸語の多く）など、いろいろな言語で類似したかたちが見られるが、ニュージーランドのマオリ語ではnamuといえば、ご当地名物砂バエのこと。やっと到着した新天地で遭遇した吸血性のこの虫は、夜中に聞こえる蚊の音以上にうっとおしく感じられたことだろう。本物の蚊のほうはといえば、wairoaというまったく違う名前でよばれるようになった。また、フィリピン・インドネシア地域で食用、薬用、儀礼、染料の採取など多様な場面で用いられるウコンは、kunigやkunitなどとよばれるが、マダガスカルの北東海岸地域では同じ語源から発達したhunitraという語がつる性植物の一種を指す。植物の形態はまったく違っているが、根から染料をとる、という機能の上での共通点から、新しい土地で見つけたこの植物をウコンと同じ名称でよぶようになったものと考えられる。

与えられた環境に適応しつつそれぞれが独自の文化を発達させたオーストロネシアの諸社会は多様で、言語以外の要素ではひとくくりにすることができない。またその言語も、長い年月をかけて分岐を続けてきており、今ではそのまま話して互いに通じるわけではない。それでも専門家の目をとおせば系統を遡ることができるオーストロネシア諸語は、空間のみならず時間軸をとおして見えないところでしっかりと結び付いているのである。



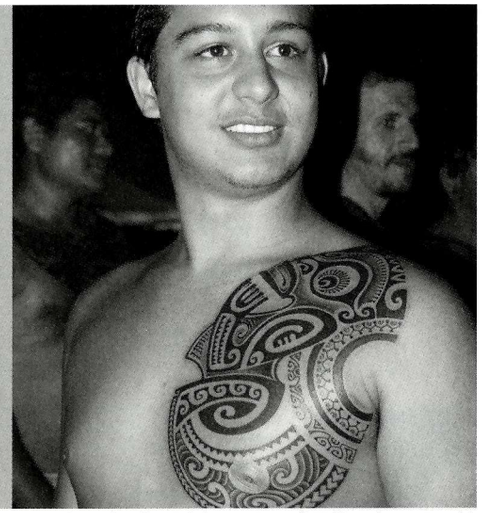
	言語（話されている場所）	目	空	道	手	2	3
1	パイワン語（台湾）	matsa	kalevlevan	djalan	lima	ḍusa	tjelu
2	ボントック語（フィリピン）	matá	dáya	dálan	líma	duwá	tulú
3	マラガシ語（マダガスカル）	máso	lánitra	lálana	tánana	róa	télo
4	マナム語（パプア・ニューギニア）	mata	lang	jala	debu	rua	toil
5	ツバル語（ツバル）	mata	lagi	ala	lima	-	tolu
6	ラパ・ヌイ語（ラパヌイ（イースター島））	mata	rangi	ara	rima	rua	toru

特集 オセアニア

タヒチのタタウ

桑原 牧子
（くわはら まきこ）

金城学院大学准教授



タトゥーネシア（2005）に出品されたシメオンの作品（タヒチ・モーレア島）

「タトゥーネシア」というタトゥー・コンベンション（刺青の彫師やタトゥー愛好家が集うイベント）が、二〇〇五年にはタヒチのモーレア島で、二〇〇六年にはタヒチ島で、仏領ポリネシア内と世界各地で活躍する彫師を招いて開催された。連日、ブースからマシーンの音が響きわたり、タタウ（タヒチ語で「刺青」の意）愛好家のみならず、観光客、地元の若者、子ども連れの家族で賑わった。タタウ・コンテスト、知的所有権や衛生問題についてのワークショップ、写真展とビデオ上映など、タタウ関連のイベントのみならず、ダンス・ショー、ファッション・ショー、コンサート、伝統工芸の販売、タヒチの伝統料理マア・タヒチの会食など、仏領ポリネシアのフェスティバルではなじみのイベントも数多く催され、ポリネシア文化の一部としてのタタウを満喫できるコンベンションであった。

タタウの伝統は古く、一八世紀に西欧人探検家たちが初めてタヒチを訪れた際、島民の身体に施された幾何学模様や動植物をかたどった模様が観察されている。タヒチの世界観に組み込まれていたタタウは、一九世紀にキリスト教宣教師によって禁止され、約一五〇年もの空白期を経て一九八〇年代に文化復興運動のなかで復活した。タトゥーのグローバル化の波は仏領ポリネシアの島々にも打ち寄せ、現在、タヒチの彫師たちはマシーンを使い、自分たちのタタウに、他のポリネシアの模様、トライバル（黒のみの彩色で、流線型で先が次第に細くなり最後は尖ったもの）、日本の刺青、欧米のタトゥーのデザインやスタイルをとり入れながら彫っている。

近年、タヒチのタタウの価値は、仏領ポリネシア内の文化復興運動とエスニック・アイデンティティ構築のみならず、グローバルなタトゥーの世界とのつながりのなかで生まれている。「タトゥーネシア」は、グローバルなタトゥーの世界にタヒチのタタウを紹介するとともに、タヒチの彫師が海外のさまざまなスタイルや技術を学び、欧米や他のポリネシアの彫師とのネットワークを築く絶好の機会となったといえる。

オセアニアの災害文化

林 勲男
（はやし いさお）

本館民族社会研究部

同種の災害を頻繁に経験してきた土地には、災害に備えるための知恵が育まれていることが多い。災害研究の分野では、総称して「災害文化」とよんでいる。日本では、木曽川流域の輪中や、東北の三陸沿岸地方に言い伝えられている「津波てんでんこ」などがよく知られている。後者は、津波の危険性があるときは、家族の安否を気遣って探すよりも、先ずはバラバラに逃げることを教えるものである。現在の「災害体験を風化させるな」「災害の教訓を伝えよう」との動きは、あらたな「災害文化」の創造を目指しているともいえる。

南太平洋の島嶼（とうしょ）間の交易も、それぞれの自然環境の相違を背景にしたセイフティネットとしての「災害文化」と見ることができる。ミクロネシアのサウェイ交易やニューギニア島パプア湾沿岸のラカトイ交易なども、緊急時のセイフティネットの形成機能をもっていたと考えられる。しかし、こうした歴史のなかで形成された災害文化にも、限界があることも確かだ。

二〇〇四年一二月、インド洋で津波による巨大災害が発生した。そのとき一九六〇年に南米チリ沖で地震による津波が発生し、ハワイ諸島や日本の太平洋岸に大きな被害をもたらしたことを思い出した人も多かったであろう。また、進行する地球温暖化は、熱帯性低気圧の発生頻度や規模を拡大するともいわれ、エルニーニョを含む気候変動による海面や海水温度の上下動や干ばつ・集中豪雨の発生も、人間生活に多大な影響を引き起こしている。一九八二年から翌年にかけて、また一九九七年から翌年にかけて、エルニーニョ現象の影響で、西太平洋各地は深刻な干ばつに見舞われた。災害の因果関係が地球規模に複雑化しており、国際的な対応のとり組みが始まっている。ダーウィンはガラパゴス諸島を「進化の実験室」とよんだが、オセアニアの島々は、今、人類生存への警告を発している。

渇水被害で干上がったヤップ島内のダム（1983年5月）

「ホエール・ライダー」とマオリ社会

内藤 暁子
（ないとう あきこ）

武蔵大学教授

マオリの少女たち

二〇〇三年に「ホエール・ライダー（クジラの島の少女）」というニュージーランド映画が注目を集めた。主人公の少女を演じたケイシャ・キャッスル＝ヒューズが史上最年少でアカデミー賞主演女優賞候補となったことは、この映画の国際的評価の高さを物語っている。監督はマオリ女性ニキ・カーロ、原作はマオリ作家ウィティ・イヒマエラである。

イヒマエラがこの物語を書いたきっかけのひとつは、娘から「なぜ、映画のヒーローはいつも男の子で、女の子は決まって〝助けてー！〟と叫ぶのかしら」と問われたからだという。彼は、祖父（長老）から否定され続けた少女がやがて救世主として象徴的に生まれ変わり、指導者として一族や地域社会に受け入れられる物語を、神話を題材として創りあげていった。

しかし、映画の舞台になった地域のマオリ社会は、女性も指導者に擁したことで知られている。こうした前提は原作には登場するものの、映画では触れられておらず、無垢な少女が男性社会に立ち向かうという単純な設定になっている。祖父と少女の葛藤はスピリチュアルな存在としてのクジラによって一飛びに克服されてしまうのだ。加えて、クジラをとおしたピュアな先住民族イメージの投影も気にかかる。

とはいえ、マオリ文化における神と自然の結び付きを考えるうえで、映画におけるクジラの描き方は示唆に富む。原初、万物は神々がもたらした子孫であり、すべてを包み込む結び付きは調和がとれ、人びともそのなかにあった。少女の一族にとって、クジラは神話や祖先と結び付く聖なる使いであり、かつ貴重な資源であった。クジラを海に戻し復活できたことは、西洋化が進みアイデンティティが揺らぐマオリ社会において、マオリらしく生きることの困難さと可能性、そして素晴らしさを暗示するものである。

最後に、この映画でマオリに興味をもった方には、現代マオリ社会の苛酷さを描いた映画「ワンス・ウォリアーズ」も併せてお勧めしたい（本映画は、一〇月二八日に民博講堂で無料上映される）。

特集 オセアニア